考えを広げたりまとめたりする力を育成する小学校国語科の授業に関する研究
－クラウド上のシンキングツール等の活用を通して－

下関市立安岡小学校　教諭　大貝　浩蔵

1　研究の意図

(1) 研究の背景

中央教育審議会答申では、「ＩＣＴを日常的に活用できる環境を整え，児童生徒が『文房具』として活用できるようにし，『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善に生かしていくことが重要である」*1と示されている。

(2) 研究テーマ設定の理由

ＩＣＴの活用について、黒上は、「思考ツールを使う各段階で、ＩＣＴを用いることで大きな効果が期待できる」*2と述べている。クラウド上のシンキングツール等は、大量の情報を焦点化したり、迅速に情報を伝達し、反応を見たりすることが容易にできることから、その活用により、学習効率が上がり、児童にとって分かりやすい授業につながると考えられる。

そこで、本研究では、国語科において「情報の収集」「内容の検討」「考えの形成」「共有」の学習過程に応じて、クラウド上のシンキングツールと共同作成・編集ツールを活用する。具体的には、情報や考えを迅速に共有・複製・利用・修正したり、対話をしながら共同編集したりする学習活動を設定する。そうすることで、児童が感じたことや想像したことを拡充・整理したり、他者と自分の考えを比較しながら考えをまとめたりする活動が促進され、児童の学びの深まりに寄与すると考える。

(3) 研究の仮説

学習過程に応じて、クラウド上のシンキングツールや共同作成・編集ツールを活用し、多様な情報や考えを共有したり、話し合いながら考えを整理・価値付けをしたりすることにより、児童の考えを広げたりまとめたりする力を育成することができる。

2　研究の内容

(1) 本研究における「考えを広げたりまとめたりする力」とは

本研究では、「考えを広げたりまとめたりする力」を「多様な情報や考えを取り入れたり、話合いを通して様々な視点から検討したりすることにより、知識・見方が変容し、互いの意見の共通点や相違点、利点や問題点等を既有の知識や理解した内容と結び付けて考えを形成していく力」と定義する。

(2) 授業実践

原籍校の５年生129人を対象に、６月と10月にシンキングツール等を活用した授業を行った（**表１**）。６月は「日常を十七音で」をテーマとし、ウェビング等を活用して俳句作りの材料となる「夏」のイメージを広げ、共同作成・編集ツールを活用して俳句の工夫に着目した話合いを行い、一人ひとりが俳句にまとめた。10月は「よりよい学校生活のために」をテーマとし、安岡小創立

表１　活用したシンキングツールと共同作成・編集ツールの活用場面

	活用したシンキングツール	共同作成・編集ツールの活用場面
６月「日常を十七音で」	ウェビング、ダイヤモンドランキング	作成した俳句の工夫の検討
１０月「よりよい学校生活のために」	フィッシュボーン、座標軸	安岡小創立150周年企画の検討

150周年の企画について、フィッシュボーンを使いながら自由に考えを広げ、共同作成・編集ツールと座標軸を活用して条件に沿った話合いを行い、グループの企画をまとめた。

(3) 授業実践の結果と考察

「情報の収集」「共有」の学習過程において、**図１**に示すとおり、考えの広がりが見られた。夏のイメージを広げる活動において、「夏」から連想した言葉の総数は、学年124人で1512個から共有後５分の活動で2455個に増加した。企画のイメージを広げる活動において、企画のタイトルの総数は、学年129人で108個から共有後７分の活動で232個、さらに翌日５分の活動で395個に増加した。

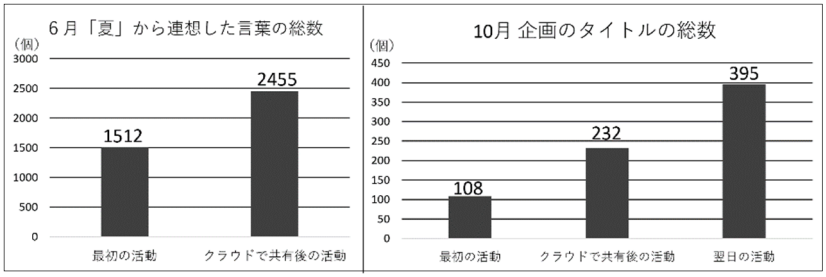

図１「情報の収集」「共有」の学習過程における児童の考えの広がりの様子

また、「内容の検討」「考えの形成」の学習過程において、振り返りから考えをまとめる様子が見取れた。俳句の工夫に着目した話合いの振り返りでは、「友達のアドバイスのおかげでよりよくできた」「自分の俳句に自信がもてた」といった記述が多く見られ、言葉を再考したり表現を練り直したりしている様子が見取れた。グループの企画をまとめる話合いの振り返りでは、グループで決めた条件を基に検討した結果、一人ひとりの企画を関連付けて一つにしたり、一つの企画を選んでアイデアを付け加えたりしてまとめている記述が見られた。多くのグループが条件に沿った話合いをした結果、納得解を導き出している様子が見取れた。

さらに、授業実践の前後にアンケート（複数回答可）を行い、シンキングツール等の有効性について検証した（**図２**）。シンキングツールを使ってみてよかったと思ったときについて、実践前は、「どんなときかよく分からない」のみを選択した児童は13人であったが、実践後は、そのうちの９人が「考えを広げるとき」や「考えをまとめるとき」によさを感じると回答し、変容が見られた。また、共同作成・編集ツールについても同様のアンケートをした結果、実践前は、「どんなときかよく分からない」のみを選択した児童は14人であったが、実践後は、そのうちの11人が「考えを広げるとき」や「考えをまとめるとき」によさを感じると回答し、変容が見られた。

これらの結果から、クラウド上のシンキングツール等の活用は、考えを広げたりまとめたりすることに有効であったと考える。

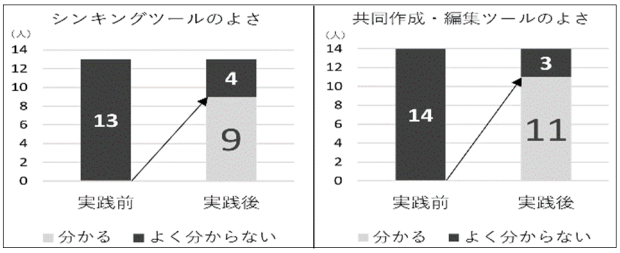

図２　授業実践の前後のアンケート結果

３　研究のまとめと今後の課題

学習過程に応じて、クラウド上のシンキングツールと共同作成・編集ツールを活用することは、児童の考えを広げたりまとめたりする力を育成する上で、一定の効果があると考える。今後、更に活用していく上で、児童の考えを広げたりまとめたりする力を見取る評価規準を明確にして、適切な手立てを講じることが必要であると考える。評価規準の作成やクラウドを活用した授業についての研究を進めながら、児童の考えを広げたりまとめたりする力を組織的・継続的に育成していきたい。

【引用文献】

＊１　中央教育審議会，『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）』，2021，ｐ.75
＊２　田村学・黒上晴夫，『「深い学び」で生かす思考ツール』，小学館，2017，ｐ.15